

かずさの博物誌

ツミ(雀鶴) ~鈴を張ったような眼~

文・写真／成田篤彦

「逃げるなよ」と祈りながら、シャッターを切った。あいにく背景が電柱。空とそれとのコントラストが強く撮影が難しい。1枚撮つて液晶画面で確かめて、絞りなどを変えて何枚か撮つた。また、姿勢を低くしてそっと位置を変えてやつと素人なりに撮れたのがこの写真。胸の模様からみてツミの幼鳥だ。「子猫のような」と思った。時々空を見上げる姿はかわいらしくのどかな気分にさせられた。

目の内も鈴をはりたる小鷹かな

秀重（有馬朗人外4名監修2008『ザ・俳句十万人歳時記秋』第三書館）。

34℃の猛暑が続いた今月の上旬、木更津市の広く奥深い谷津田の風景を撮りに行った。この時期、すでに稲が稔りたわわな穂が黄金色に色づいていた。そして、一人として会うことなく、そこかしこに10数匹のウスバキトンボがそよ風に吹かれ飛び交っていた。

お盆前なのにすでに郷愁を呼ぶ上総の秋の原風景が見られた。

さて、撮影を一通り終えての帰り道、森林沿いの曲がりくねつた旧道を走っているとハト大の小鳥が小高い山の頂から下りてきて電線に垂直に止まつた。

「大きな頭と眼、すらつとした姿、ひょっとして珍客?」。その瞬間に、今まで図鑑でしか見たことがないのに、大きさと止まり方から「ツミでは? タカなのにこんなに小さいのか?」と思つた。急いで車を止め、そつとカメラを荷台から取り出した。遠くにカラスがいた。「ツミを見つけて追わないといいのだが」と思いつつ、



©成田篤彦

▲ツミ タカ目 タカ科

日本最小のタカ。県指定重要保護生物。北海道～沖縄まで繁殖。全長オス約27cm、メス32cm。産卵期4月上旬～5月上旬=2010年8月7日 木更津市(成田篤彦撮影)

▲空を見上げるツミ
近くにハソボソガラスがいた。
=2010年8月7日(成田篤彦撮影)

10回ほどシャッターを切つた時、ヒヨドリが背後からツミを見つけて飛んできた途端に「キキキイ」と小さな細く甲高い声を残して猛スピードで水田の上空へ飛び去つた。ツミの大きさはヒヨドリとほとんど変わらなかつた。

ところで、平野敏明（1996『ツミ』日本動物大百科3平凡社）によれば「ツミは1980年代半ばから関東地方を中心に市街地の緑地や市街地周辺の小規模な林で繁殖するようになつた。スズメ大からツグミ大までの小鳥類、コウモリ、ネズミなどの哺乳類、セミなどの昆虫を捕食する。」という。

千葉県では1960年発行の千葉県鳥類目録には「林内を飛翔するたまに巣をつくる」とある。また、2年発行の千葉県の自然誌本編6には「主として北総台地部に生息し、近年少數の繁殖が確認されている。初夏に林縁部や道路沿いのマツ類などに巣をつくる。」とある。また、千葉県レッドデータブック2000では「渡りの時期には少數が観察されている。越冬状況については不明な点が多い。」という。上総では少ないけれども繁殖の例があるそうだ。ツミもコゲラなどと同様に近年になって市街地に生活の場を広げたらしい。ツミがいた道路の山の裏側の谷津ではオオタカなどの猛禽類が観察されていて、早春に「キキキキキ」と甲高い鳴き声を何度も聞いている。野鳥の専門家に聞くと「オオタカかツミではないか」という。8月上旬は渡りの時期としてはまだ早いそうだ。近くで彼らが繁殖しているかもしれない。もしそうであれば、小さいながら凛とした姿とかわいらしさを漂わせているツミが毎年見られることになり、楽しみである。同時に、繁殖を妨げるような行為は厳に慎みたいものである。



©成田篤彦